

「明治学院大学将来像」

シンポジウム開催記

辻 泰一郎

2月27日(土)と3月27日(土)の両日、「21世紀に向って 明治学院大学の将来像」に関する学内シンポジウムを開催した。テーマは第1回目が「一般教育と専門教育について」、第2回目が「学部再編成について」で、それぞれ発題者とコメンテーターを立て参加者との間でディスカッションが行われた。

こうしたことを思いついた狙いは次の点にある。今どの大学でも大学改革ということが叫ばれ、教養課程の再編を中心に専門課程ひいては大学の教育課程全体が大きく見直される時期に入っており、すでにわが明治学院大学でも大学執行部、各学部・学科でそれぞれの案が作られている。

混沌とした時代のなかで明治学院大学が自身のアイデンティティを鮮明に掲げ、社会と時代の要請に応えながら、教育と研究の分野で真にオリジナルな成果をあげるために、教職員がその所属の壁を越えて集い、明治学院大学全体の改革について意見を交わすことが必要だと考えた。

今次の教育課程改革は、戦後新制大学の画一教育課程モデルを自由化し、各大学に特色ある教育課程を作らせ、同時にその責任を負

わせようとするものなのであるから、この改革は各々の大学にとって新たな出発点を画するものとなる。

変化が求められているとき、その変化に大胆に対応できなければならぬ。それも柔軟にである。人間関係の閉鎖化と組織の硬直化は変化への障害となる。組織と所属の垣根を越えて教職員が大学の将来像について自由に議論し、交流し、それを通じて相互の信頼関係を密にしていくことが根本的に大切なことと考えたのである。

本年1月中旬このようなことを考えながら、大学改革と学部再編問題に関心のある若い先生方にシンポジウム開催の相談をもちかけ、呼びかけ人として協力をしていただいて、実現したのが先のシンポジウムであった。

両方とも午前10時すぎから、午後5時30分すぎまで、種々の角度から発題をしてもらい真剣な討議を行うことができた。

私個人の感想としては、教養（リベラルアーツ）教育を学士教育課程の目標に設定する方向と専門職業教育を目標に設定する方向との相互関係、大学改革の現実枠としての大学財政状況、それに、白金、横浜両キャンパスの具体的な学部構想等、十分に議論しきれない問題は残ったが、私立大学のわずかばかりの春休みの貴重な土曜日をさいて、第1回目34名、第2回目49名が参加して議論を行い相互に理解を深めることができたことはやはり大きな収穫であったといえる。

発題やコメンテーターとしてお願いした方々がことごとく協力的であったことは本当に有難いことであった。できたらこれからも続けていって欲しいという意見もいく人かの人たちから寄せられており、ユニバーシティ・アイデンティティ形成の一助として本学の重要課題（まぎれもなく「キリスト教主義教育」の検討はそのひとつであろう）を自由に討議する機会がいろいろ設けられることは望ましいと思う。

私自身にとってこの集まりが持った特別の意味は、普段望むべくしてもなかなか実現できないこと、すなわち、一勤務員として明治学院大学を学習することができたということであり、実に得がたい機会であったということである。その意味でこの会を支援し参加して下さったすべての方々に深く感謝申し上げる次第である。

（つじ たいちろう

所員、法学部教授）